

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

新撰猿蓑玖波集
下



4M5
1964
2止

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30

1964
2



猿蓑玖波集 卷第七下

戀誹諧連歌



成の妻を申れ傾城
 猿蓑いふまればきこはぬ蜷夷禱
 藤をよみて傾城とぬる
 けしからし半も厄年の苦
 傾城のむとる妹しき 祝 名 梅 郊

静しけ物ふたつゝ。是の言
うゝ。寐も志人の寐ぬ似城

吳父

伴頭も今ハ言後と意く也
を理り通て似城を妻

涼山

心ふとまゝい罷されぬ方の死り
笑ふおちあふけいせい

素藤

志まるとないやうて指ては直て
まゝ似城の惚てとい人

一巴

は名つて初ふると年忍びを
言悟も暗くぬけいせい

芭我

下一

さつとろとないも淋しき積瘧
乳ハ禿と曰し事い

外世

どのちほうんのぬくもせん
まゝ虚のやうな虚つく小似城

亀文

脊中誇いてちうりてんか
愚揚不同し女帝母女帝

吳父

河七あそりもそるるぬの口
よい人といされる老の女帝賞

夜静

大新ま冷氷ら取ハセツ
お女不徳ふ理る笑け

素人

家客よりハ秘んろりな 寛之

屏風紙厚紙のうへに腮とのせ 寛之

茶屋ハ階子の下子提 煥 龜立

玄傳の脊中 振より押いり 今ハ余儀がさ人のあいろり 伯幹

悟いとハいとまやうにそ面白 正して見れハ毎の写遠に 伯幹

誤りもさきに抱はくを理の流 著紙も終ハ謎の支帰中 蛇田

悟んと静と巻くる 元日 下二

主用とある子おきの標ヤッさ 吐風

かいとろりせろり 階子下りきり 質ある程も常ハ街 張

流出さきさるる遠いさくけ也 大もめらむそくとして急変して 吐風

やうく身流 壳注出さ 地獄ともさぬ心の佛が 赤明

壳起せむ蚊のちりとも 支例のちやめさるるなみつき 赤明

壳を抱けハ茶屋の子ら注 壺波

立つてもきくぬも先方ハ武士
急用をまきらる鹿 息 と 切 芝 水

市とちりへうじむけ香
床もるき服る変とおもひきり 亀 文

亭主のあつとつあまそそを
決りあけりきりへうけ耳をも

連待合ハ物法の茶屋
待供おきまうへうきききとそ 眉 山

濡らうそ清いき強のききき
柔のしも使者の既記

多玖小造のあつてしり 唱
柔のしも負う後まの基もちて 素 角

物踏て後へききし絨燭の灯
かいとすととてと平既既て所 操 舟

小隅あつたき行 燈の裏
柔のしもちかかとも六形成して 小 遊

白歯ちりしととをんおききともち
若盛 蕭何陳平かしけきき 素 玉

刀ふさけりまのいあつ
借小医を名遊のし法りと越させん 素 人

謎ハ出さず誘ハ意不用 簾 笥
吉原ハたまふ由くも 孝行

貞知

奢らハ流石 長年の老
吉原名多し 陰房鬼火子似て

眉山

三千の義人 互ふ志々 奴顔
くく京へ 可めて 足さハ大國

花城

包じ小神の 奥ハもと 裏
若ふ一京の せむちくもと成

盈斜

二階うら 足れハとく 比下の疥
解法きの 日ハ俗 吉原

素人

下四

揚出ハ 幅せまき 雨と
灯ハ 足えまう ありるよ 京

梅壽

赤あの中と 落流く 下詰のき
まもか ともして 暮る 大門

病室の せむち けり けり
大つの 掟り 矢の ないさ けり

素月

女中 方心 せむち けり けり
時 面 せむち 大つの 茶 屋

寛藤

新大 入り せむち けり けり
新大 入り せむち けり けり

一巴

あてやると肥る茶屋の女房

寛之

あつたに不出るう女房の託を振

吐風

六羊かきり花踊の大踏き

婆百

揚屋て出して見える池念

十教

大花石の掃庭 千枝

霧水

白昼の揚屋がんと通り 雨

下九

静な風のうとる 雪 京

下九

淋しさハ古き新造の時る月

雅郊

木辻一もゆく朝茶の子賣

栗堂

且那ハたさち 借を二十又

龜文

大ていふ事とあみすなす

公史

漆枕着とらゆの中子舞

公史

おれ若口士の目と目まじり

公史

おもひさし思ひぬ君を判し急

公史

生多持出我を欺く下居者

公史

飛ちとらへて酒を仕上る

公史

ぬるい巨燧も春乃りあつて
若成りの思たぬ亦へあうく
梅郊

紋おききくてもきる
たふらき切のへりくま
素竹

赤らじ顔も負ひきくひう
あてもあふ三法あのみあ
眉山

燭臺のめくを携ふひこ
似心を者小助ケるさうき
呉父

志まはあひて上 答と待
言白な歯小梅干れとま
松水

志帯てうり花ゆれ志こ
ころりいれやうと向てる
吐風

やここも悟をきき
伶合せや言志の申へ
呉仙

漕やうも用のある舟
意者小こまのそいふ
花蓼

たのまふまをおり大こ
確子と糖乃進うける下
錦芝

床ると人ふを以初屋
えよいとてんふくる香
婆百

刃こもりのまゝ定めてうらまき
慟と焦炙しておもむはしむ

梅郭

掃除おのふ日昼乃風
うたゝ疎ハさうされちのあられお

、

萩植させしちの夕くれ
遠くの子ふあさうさすう

凉山

日の入残る桔梗緋ちぐり
三階のうしろ姿ハ髻如ひとら

呉仙

昔年のまゝを簾アえすく
源氏画のやうに揉ひし洗ひ髪

下七

むのまゝと目のまゝとる若女町
函せら服乃の如松とさす

雀舟

大沖と摸不飛りる閑日
書を抱ゆるみ乃なるハお目

亀文

おをさくらさくのうらー斗累
ゆらとつらるみお笑ひを吞とて

呉夕

綏えいけい年てもまゝ白歯
祝ひある日の帯れをら解

素琴

笑子もおんあなしれは
物おもふ心のやうな喜のる

其礼

惻不旭のちもる 妾宅 貞知

やめあらく成し殺年の不事らせ 証めなき冬の半のわが友 脈光くくして遠くえのちい 百童

あくもいさあしむもはれ 髪 為清りく日ハ物怪れせし好 在舟

子ハまやしくも今寐入をさ やけくると眼のちきく春とて 龜文

冬の日と人れ半まで小一竹 神のちえく立すの張 ト人

下ハ

つ納涼まきまぬおさと思ひ子 故小くを道ても又氣くくり 公佐

火を吸けけふかけぬけし僕 茶拵時字治も涼きふ見ゆる也 芦皓

短夜なうら長くれぬる 抱籠も沖のちるぬる孕村 九室

廓高以ハあきてるか今ふ 原月も髪さるるさと産切老 伯幹

提燈て意く思す客の夜を 去る婦小母を怖さるるす 芭我

志つとりとめる禰小素湯斤子
婆百

産ぬ皇國小友方の母
起

遠るよりてほめる
賀重

天下一らもぬるを
賀重

夜と寐るこもいなき子也
賀重

男乃子留男まぬも産る
賀重

定て居るを元祖少長
賀重

埋之穴ふ茂とたのむまぬ中
賀重

悪癡てないの八世宗方の親
賀重

丙午年七かくるは添通
貞知

下九

あまを柔らくの子ハおぬ也
田
君の果縁て新と作るを小
常路
蒔繪の重小茄子九つ
雅郊
多く下七秋葉親の小笠系
雅郊
日も志と和ふ義はく記の末
呉仙
石壇を上る被の長く入る
呉仙
仲人口も出入侍
呉仙
被不と扱末 絞の意を出し
合浦
余義かくも又どるうら動化性
合浦
夫のぢん業をかす電駁
虎角

前岳の伝 妻 岳 半 分
李 克

慈 礼 の 中 小 一 軒 氏 家 様 哉
母 兄 え ぬ 添 舞 乃 歌
其 葉

四 谷 中 雨 と 隔 川 山 川
相 舞 の 詞 乃 信 小 足 り 斜 々
来 道

今 夕 花 乃 年 七 古 云 也
元 日 小 持 あり 見 せる 舞 川 出
執 舟

草 柄 八 舞 も 是 悟 の 水 祝 び
余 幸 志 々 乃 の 着 い 若 と 毛
田 様

文 小 不 と 乃 草 の な い 山
鞍 鞆 の 勢 以 及 乃 心 寺 小 姓
貫 太

烟 渦 と 登 て 礼 次 腰 の 女
若 花 々 系 て 中 なる 屋 振 舟
吳 父

八 膳 花 び 一 酒 の 海 系
雷 小 落 き 勝 なる 茶 屋 若 流
吐 鳳

芦 乃 乃 か くれ 子 妙 足 の 石
菱 乃 乃 六 たり 小 走 なる 女
秋 蒼 雨

引 乃 乃 あ ま した の 弓 ね お 才 子
入 口 を 願 ぶ 乃 々 中 絶 々
来 道

初秋の表に霞も巻けき
涼山

乳母も足で来る小鞆の影
操舟

ちんまりと居て洗ふ池
寛藤

照勅りて柔まらば窓下り
ト入

悲よ〜風を足せてゆく隙
亀洞

出かたりの後守る小衣新して
下上

川せいの屋敷秋々来より
下上

う〜の蕨云て可也小淵も
下上

行替ハ隅とめことり横ゆり
下上

燭はる時のさ〜そ中の風
下上

有の候ひる〜え〜とりの柿
下上

下女の母あると田の年暮り
下上

出入る八百屋の袴姿の足ぬり
下上

片忌指下女仕忌世を初はる
下上

眼小おれと見ていそげ泣く
下上

下女出るおんさ〜強揃り出
下上

ま〜三十おかし〜ぬ計
下上

お〜ぐ〜さ〜上〜年暮り
下上

日初らよさお出た〜ひ〜冬
下上

黄〜心暮の淋〜き咽比丘尼
下上

青芝

猿蓑玖波集 卷第八

羈旅誹諧連歌

晴いけ一晴るまゝ一旅着流

湯治坊へ来てた若る百姓

花聖

向後おきやまは梅花心易

佐谷とけり後のとらねも果て

亀文

宵と夜文ハたや遠の秋

己の宿を屏風はたふ休又舟

梅壽

下立

膳ハ先つまで忌智まむ色

母の糸を破るる奴猿乃けり

素琴

月しろの障子ふとむと破り

兼夜露一き須戸の猿籠を

其友

妻ハ隣へ風呂ふよハまする

旅の糸と忘りて仕度不糸乃ぬ

合浦

糸ハいさましき妻の初旅

京ハ既伊勢移のと合らさく

素云

空うらつくと船小朝東風

圃國もよりの花乃公けり

輕舟

砂及ふくまて花柳の芳れ足
屋根を月當小田舎本陣
公曳

貞實の行届きくる小人扱
書院小巨燧在御本陣
素云

とろけよ念も増下の町
園札の根子も培い水をかひ
笠鉢

不のくと明石のまほ次六の松
灘ハマを大各は船
芦皓

人小あふとハ今の人而已
松原子ぬき刃の落一胡朗
吞鳥

猿蓑玖波集 卷第九

雜諧諧連歌

綫布小紗子小袋衣忌ふくま
人相の内と秘薨の長眉毛
貞知

旭の笑も忘まるハ朝
城小杖尻不笑の人ハなうり急
素盈

素内一ちくら通る店比丘尼
長傘な隠居お家内灸上戸
仙里

律廷宮三夜小二度の最光古
家も命に業の清くぬ母
栗堂

仮初子太年きつるい江戸住居
さそなみ人小業とはめる母
貞知

線そのくまふ紺屋のうす氷
沼て成る母の望ま化
公曳

掛物の久しかりて掛替り
業も廣くと母の床あけ
吳龍

豆いる言も師走年越
呵れもきぬおふくろの目あそぬ
錦芝

吉日七極暦のそ造作示
隣へ蔓のうらむ子後え
百挂

人物も侍りて城代
子福若のうらむ味もさむ沙汰
芝水

植木小日傘を理な持も
子あるて親しむの片く
素琴

似ことよの紗結ふ末をハく
印んちうと云月てこまる乳
兄才
不遠

老の業の体めハそきた業の体
安産程の吉日七なり
行露

汁妙ハ出入仕初て十丑年
産下の吐沈むあつら灯
公曳

は局と勅さたけの二箇の如
多上とせぬちうり 縁の結
過橋

務負がりて外一境の基
伎業して出あつら医名も下戸ちうり
賀重

暑さ何血氣さうりの喜登る
医論ちうりて採茶も出る
公曳

衣子内を五五あふぬちうり
おもしく染根とせふ本草者
寛之

親子のなつらゝ家上ケ
有くそあ乃のあまりの施茶院
来道

胡粉うらちる波のかけ紙
漫療治足長嵩や身長島
操舟

掃出れあふ朝飯の膳
按六事てふ支と針る二日
操舟

おのちとせらば湯上りの候
按六事内ふ古郷の夢とらて
花聖

出えろ是町の喜心春さる
杖七事と書つらちそ茶権廊
亀文

檢 挿ふがらぬ ちり子 粟八佛
大座の獨と店 賀子 女也
不遠

女座の美見 月 ちり 管子 ぬ
内 腹を 掻さ する 粥
芝水

冬 うれの 面 寂 静 子 提 燈
公事 も 忘 び 大 病 と 訪 ぶ
栗堂

節 句 對 ても 際 を 下 店
漆 負 義 の 二 階 小 屋 て 見 る
聲 波

半 小 訓 くる 女 房 の 兄
火 熱 小 枕 の 刀 を さ け け ち
執 舟

人 渡 満 さ ら 延 び 四 月 の 閏 月
瘡 の ち や る 令 子 延 び 乃 山 大
吐 鳳

夜 の 峠 乃 八 乃 乃 乃 乃 乃 乃
痘 瘡 の 伽 八 八 八 八 八 八 八
雀 舟

ちり くと 日 の ま っ ぱ ら 天
眼 病 人 乃 一 祐 小 云 関 玉 圃

厨 子 小 ち る 事 事 事 事 事 事
者 病 り 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
龜 文

海 次 口 を 出 る 鼻 先 へ ち る 乃 乃
と 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
雀 舟

草の戸なぐらねまねしあさ
尊も年へ志つくりおまの 徒 百桂

いさつともこころの子屋敷の子
途なつて見る 素 素藤

取上り浪汰山な 遊女町
疾風よハよけてやる 素 伯幹

非理法 擁の二尺八寸
侍の足半ふたす 狐 素人

百姓のふとちとちとち 岡家老
入日とまのちかへまふ復 栗堂

下十七

ほろくとも吐しも母の物 静
狐入るるち後る 一 亀文

はぐらち小傍ておせり 祇園の口
家内の教も起し 奉 紀亮

出店てハ甥も従才も兵代並
一くせあまハ若死ハせし 雅郊

み人の服乃ちあてハ寺五ヶ寺
山師の吐し 軍めいし 角麻

髪もつや白柄組のそひとと
吐し小虚の足申る 古 寛藤

壮年ハ流々汗もいさやなく
主従の糸をさける 滄面 一巴

此旅小祇園言の 往來
寺水の間にあひ 感はる居合拔 允升

待たせて出する 早月の雨より
大筒うらの抱とめ 鯉

肩癖の灸小そろりと肌脱て
弱らひまの 酌の名人 吐風

事可ぬぬえの二男三男
火とやけけ 火れハ毛 鞞三けて者 苔雨

元日乃後 四月朔日 雅郭

大小のやめゆるされ 小侍 依拵

上下急ると又 賢い武士 寛之

早退ハ眼も耳も 早退の重 寛彦

湯治せし 捨て出さけし 物の振 貞知

物おき 遠い 籠籠の大あり 貞知

うかひ 小物 さいてぬ 大兵 貞知

初朝下の第めとともきらむやう
繁くと並くふ馬の不作法 三三

芝栗干しと冬の日齒ふふ所
裾てむく馬れ妙 やく 下谷 素月

焼もちの不子際を名子まき
波めくく河れ八合 熟する士 津宜

甲矢と里も栗ハ先一者の出合
喧嘩の種を貰ふ唐 犬 梅邦

石川寄る乃埃の川 汝 吐風
床て飛さとおもひ犬の鳥とる

四つけてふるるを寐ぬくの巻下
扇ちとく一地震 落くこと 十教

眠来さまふ日陰町 心筋
中总ふしてハ威めない虎の皮 素羅

此来くくこの机智格 別
暗窟とまてて尺くろ 巻とる 栗堂

芦巻ふ杖も地方 役人
着の浦小喧演出来て雀を 一巴

二日ふけふハ 栗な代と栗
役まらぐ場所も巻く雀下りて 笠袂

は客をなむも稀をば 吐風

誇てくやふ羽根く 崔の伸ひ

山谷をけりて さい 人 一 足

白鷺の赤とめられし むこい色 一 雅部

おほれとふふ足とむらある 抱つけと連繫と 水

續いてハあれとも江戸の内て ありものろりと 水

別荘の存くはくく 水

家鴨を貰ひとる 水

下

生 吐風

大生 雀郎

式日の上坐ふ 行

碎ら 虎角

并乃とせし 聲我

上下と云て押垂るたいこお
智恵可有てい出すぬ并吞
亀文

報父の代乃時のころり
径上戸をくらせ大の男なり
来道

月ころちのる身三益多き用
上戸みま見え却のうらふ
仙里

老と大の徒千年と流まを龜
汐の満干に白ふ酒流
帶踏

あふ人集まるる店の大誇き
酒のまぬるふ湯を腐ハ石
雀舞

阿弥陀めくりハ風光るは
不自由な町のま酒と巻られて
田様

あふりれて程長くながる
路乃とに序急の出てある送る
素琴

養老ハまけぬ詞をり、クハ
一息ふこいぬをぬる首の骨
牧之

此目出さぬ沙法ハ續くむハ
こもふこく、盤のそ程
素琴

花火ハハ園いもよとせ
死界ハハ、舟子陶子
其礼

其礼

日出といとてくういぬ店ちり
又見々淋て吸もあつ出る

玉園

知て志くけしおふくろのるき
かき人より根をさるの辛子くし

貞知

代洋の日は物半のたつとまり
三汁五葉ふ人も

雀郎

雨やとと夜ハ舎りのけぬき
粥焚く由電の決も力か

素玉

的も二むき馬坊の芝原
舟出と急外走つたつ仮まら

素人

F

浴衣の半お舟の提
料理茶屋音の風雨お肘まら

寛藤

支玉の惜い下とか倉と足
蒼き麦屋の抱子やうととらんえ

仙里

涼しこの強松お室し林床儿
と急お登へる家もアヌぬ極木屋

ト

旭お涼むお通し
浅入部の乃と持る寸崖の茶屋

ト人

知りし門士を越番の
當年ハたつれと吐す目言

鐘下

古らしき弱きけり 花夢
安らとせおのなほいふ木より

人声 驚かす風の 朝風 蒼雨

糸とて七魚 煮し 所此をくくして 内

朝露を暮て仕切る 吳服屋 吐鳳

お江戸足お下たるく と 権老て 素芳

下三

麗き危きこひ言きき 素明

湖邊て月と 吳服屋の傘 色波

人目とよとむおの芽 若くき 雅郊

冬日和とおろす 糸れ春も似て 依國

利根市と川いそんなむしる 帆 吳仙

まごまごし 生花の 傘 出す

上あふんとして 麻き奈良の人 一蝶さ 富士ハ何伝そふ 笑あ 牛年

表に花をふりまるとは流くく
なまきハ上まにそても行はきり

栗堂

才子乃とあり申ハ名のみ事
唐西の系根日と語て見る

貞知

いと川遠いと兄と才
大とたふゆくも情に西師の系

色波

浪人のより本陣の世話
大憾うりことし世に書志する

青芝

春笑ハ只青くと柳の
淋さそえて学窓へ入

素盈

下書

急小旅ハ物の之と才
細ふハ大儒のうら 働うら

曳尾

四方響今ハ歌ハ角もさく
流はふされハ礼ハ可る儒者

素苜

及び橋を除とハ沈とどう
悪礼ハ才の列ハ 伶人

益詩

陰と陽との翠草の内外
集こて太鼓の役のうらぬ歌

雅郊

秋も湖陰を催す雨の日ハ
碧色を感ハと色のみめとく

麻布
素月

翌孫主ーきりふらる
新立を皆中てみる望以信
公曳

三心助町てしるハ一とら
福ら以多餅さーにたは来らる
素竹

此妻のふれおしー吸もめ
うまおえのたは根を根憎き
盈斜

居らるとまらる冬のふり
を福ら火れ側ふりたはたの歌
津宜

骨まのり後お人てしり
津福信ふ神と中たの心助とら
過橋

春ない管のふふ石も枯野系
おろんと替女乃ふと搜も替女
素竹

昔年をりハ系れ巻る町寧
笑やう小替女ハたをこと吸付て
牧之

為ほとハ埃りふも世奴年れ言
胃のふらふのまらる家
公曳

用のほく津れ稚くも武士
引伸ーふる細捌まのふも有
色我

えてたのちきき女見才
まくれ智恵とららはもの色系
梅毒

荒と伝なる 高安乃 里 虎角

物とハギいとやめする 系 車 梅壽

うとかけの夢ふよみけの春 肘 まくら 紀亮

才もあふたうく酸く 素酒 人 素角

たてハある 枕 小 彦 の 肘 枕 紀亮

男 世 帯 一 かくまる 穢 人 素角

枕 川 短 い 指 と 足 け な さ せ 人 素角

中山 一 法 月 寺 あり 中 体 素盈

菴 の 記 走 ハ 素 湯 小 腿 素盈

茶 炊 と 在 け て う ら 糸 人 ころ 雅 郊

嵐 重 ハ 地 と 以 や ち き せ う せ 也 雅 郊

後 家 育 て も 法 家 志 の 家 梅 寿

又 人 の ま も 志 人 と なる 族 方 梅 寿

家 伝 よ う 一 つ 浦 の 系 父 筆 家

何 と なく 仰 ぶ く 振 り の 折 烏 帽子 筆 家

柳 枝 一 つ 山 一 つ と なる 筆 家 牧 之

け け 鞠 の 十 分 な 腮 牧 之

物 子 可 有 る 医 七 止 以 雨 の 日 吳 夕

独 足 不 志 一 つ 廊 下 た て こ の て 吳 夕

下 英

松もふりよき智恩院 前
 夕暮の日の光かへる鞠の喜 其礼
 供待も来て現く客殿 殿
 拾好ハ左官不似る太尉冠者 其虹
 押るこはまきと若年の人
 曠能ふも笑ひてハ叶ふまー 公佐
 小春おの夜ハの志まるも越後幡
 赤又ハの暮小時とせく客 盈斜
 本宅ハふ代まかせ子子の名代 百童
 茶通奢て令と出と 年

小春初る蒲生残る江東清 雀舟
 盈川とると居て茶とまの婆々
 互小原とてさき合ふ 社
 大笑の海とあゝ客の 教
 酒小秋悟の法師也々り
 心礼清かうら雨れ咳々々以 常路
 秋茶をちまききく所護むま
 雲隠くとして常も仕直す 色橋
 蚊垂り火法へおこすけー炭
 面やとらと志まきりふ忍り送るこー 青芝

大造小彌厚のくと日待の夜
又半なまふおもひ出す旅
苔雨

唐黍以とん葦のくく畑
初切若あつれさうな場五へ行
仙里

又てまゝの世一に國 西國
海士衣まハ名たより丸 てるる
梅郊

まゝ期京及言 杯の菓子
去中不行義よく乃々舟まゝ
下谷 素月

梅美とありゆささり色む
るさー舟噴流志まうな奴り赤
酒示

菱友ともろりろきハなく五十年
別在まもるは月くみの純
亀文

夕昏くくハ海 入の秋
石灯籠をともるも志まると危
)

さうけふ勤も貝系う才子
沖灯不海刻かよの夜と涼し
公佐

つに一ちるとはくる桐もろ
行格まきとて雪ほ志げまる
露水

親善ほもほの也 一息
螺むけの曉とまて 峯 此 松
素明

嘗る乃ちありふさききく花もよこ
四本をもちろくくさるよこ元山 笠守

かん志やうなうろ老年れ花
大木ハ工面の方一伐 倒 ま 吐風

ゆ〜〜〜く思ひ〜〜〜るを藤比
馬床ても大工訂うよく利 慮得

後合の日和不成て汗とみき
大工の膠ふ研 之れ撃 梅壽

茶和尚ふすむく〜〜〜抱いとん
研と絶をかりて入る 喜 吐風

下七九

糸入白髪のをえぬ去り〜を
串き土禪の作りせ法み〜して 允升

片側陰のてや せつ あ
隅清うけ業ぬ仕事ふ〜とめて 芦皓

紫立の緒て去る〜出る 酒 吳夕

堀ぬい〜井戸場ふ〜く 笑む 不逸

さが町川家の夏れ夕くれ
力持功志いふ人皆 弱 公曳

をちとなく年ハ微弱の〜しる付
又人あ強るとすの甘揚弓

とうきさたがーのろく日れ盛
向ふくろ見るちやるめらの歌

貫太

自然と詠ふ馴く胡夕
笑つたお朝解人れ字も忘れく

雅郊

何れを懸せむ松の木ころり
熊坂の益もも禮忌る時節

百挂

室は小歌も青墓と傳く
居凡呂の時分はきそをやめれと

丸室

どぶ漬お下女おけなれ赤くと
明くやう小戸とたてる新花

歌舟

下世

繁花はへるもいよ昼の人色り
面なりと腰の浅い糸搦

津宜

きのとくな思ひの妻えくり也
あし吐のあきみの歌

梅郊

茶は瓶在番小夜の小夜時雨
麻かへる下部一俵れ音

、

草は戸も筆時の藪境
律義を蕨う小歌言は僕

賀重

是く遠ひなくら狂おの徳と奉
僕ハ元なりす音啼れ鶉

青芝

勝子此笑以現く 朔日
校ううと並されてゐるいまゆり

箕盤の膏ふきむらひの茶 盤
眠らぬ調市かハ申くハあし 佐國

仲間よきやうあ例をゆく 素山
若旅を荒木けりの角急獅子

新出してかき墓ちの下話 栗堂
さしをうと日和もとる 時

むふの忌中明て来ううく 雅郊
下世

一つ噂なる親の命朋の由友 其友
妻ととひし秋と夜路て感く危

羽振袖し一挺変るな花五挺 不逸
并帳寺く暖な 葬 礼

白砂ふ星きらくと松洩て 冥夕
笛やむくれ顔 片のまうじ

残月の斜に朝く一戸の夢 李克
西貝も黄と暮し 令 閑

何て遠入れとあれる縄すぶれ 其友
十年より此を分別 元

樓門の下ふ暗く風いきて
と衣れ乞食ふ去今の相

素芹

龍と出さ鷓鴣藤一き霜の朝
付既負れ事以仕友かかじ

曳尾

たやううこの秋も日待も
浪人ふ百地語まきんらま

吐鳳

掃除おゆく古以小簞笥
麻一さハ親の眼鏡の我子あは

公佐

きめゆと菊の山能るこ
奴のこ又ハゆく年も奈良の伯母

百桂

生えて見られハ遠く種
年とけふあうして通す負と

貞知

初老ハまゝ面白記秋も
初老ハまゝ面白記秋も

階遊

春も秋も只波の
うきとひふ綴ア一文の冊と旅

雀舟

寂えても寂て久く
其念な秋のむく人形

素云

不佞や猿の浅を
うらふもあゝぬ心まきつれて

芭波

猿菟玖波集 卷第十

賀誹諧連歌

女中ふりてハ来之まて稀
若くと餅ハ壽乃字此等あそ

雅郊

指折の分限ハ元 縁 續き

中後の笑に隠居下ら 徒

花雲

子安よむうらやめる 月 影

留くく付て来る名の目出さる

婆百

下世

学まてしななく名の廣い人
五十の難なる衣の穴赤工まして

伯幹

未赤二人ハふの 元 次

ぢのむうとても笑て耳順の笑

貫太

一代小万兩持の 糠 回 屋

五斗定ても祝ハ進る 米 礼 賀

風舎

祝ねり掛あて得出か 大 都 會

九十の年笑百小童とせく

松山

出来たとたてけりき令屏風

福も小百の年笑掛し

花籃

四季癸句

餅て見る人ハ比々此味方外
 膏乃幸七肥アツクハ取存の藪
 日さくハ凡も英人の眠アツク
 汗拭て生乃松系 氣うハ
 ことさくれふさるハ月霞の角力
 法螺ハアノ入アツク也送乃峰
 お火焼や蜜柑玉ちる刀 裨治
 素外 木丹 花縣 津富 宝馬 五璉 沾涼

下世四

歌仙 眼起

洗もまきさや雪の五葉れ庭乃松

宗鑑

古今の美と徒そゆる炭

素外

雑沓乃家ノホキ客法て
 常和くく小風息吹やむ
 清一満つ花縁乃沖れ月
 秋既鞠の連中飲とあり
 唄のふ限人まくなまて

志のうさハ荒神棚小日ウア
裕ハ恙ても夏とたそそぬ
侍ちよのむうれ半そ香小句小
万部乃寺小女中輝く
去盛なう鴨足時存もみち
残の月午落志られぬ
齋厨乃見る小振し肌を
給う沙汰の酒小女中
木ハ花藪と摘みたまふ也
陽火をまそり雨後ハもやく

涅槃像北殿司とハ穢もの
きよきよと云ふ此親類
同い年をきと悔しや麻呂て
障ハさうれを毎々為葉を
隅くハ園き象根の冬うた
猪狼もよけむ山ぬ
戀中をれもけおそ然にぬ
舞小包う黄令志とち記
兼て出る覚快の舟も返風小
唐人屋敷をあくとなる

日小あぐり短有月不き
 う乃花淡しあてさる
 今瞬の出来まはるをとり片まて
 訪をきし乳母の老も忘れ
 立方の旅芳きさるえさり
 二十九日の翌れ朝日
 ぬるをとり花波と出し花の雲
 流きひるくる川のあさる

誹風柳多留

則 補助 櫻木庵

源氏活花手引草

十葉籠下先生活力記又
 松茂齋の遺著 出来

和漢軍談記略考

諸軍談歳番類自委の記又
 能二品類書名号入 出来

誹諧編

江戸宗通如直二生て高良ノり集ノ撰書
 蘭山通風ヲ委ノ記又
 能二元何ノ系端ヲ正シ其居ヲノ最ニ記又
 英書数人雪城著 出来

東蔵山下竹町

星蓮堂神

花屋久次郎

